

平成29年度（第40回）

校内放送指導者講座 報告

平成29年12月26日（火）、27日（水）の2日間、東京都千代田区紀尾井町の千代田放送会館において、全国放送教育研究会連盟とNHKが主催する校内放送指導者講座が実施されました。この指導者講座は高等学校における校内放送活動の意義と役割を深め、その指導についての諸問題を究明するとともに、具体的な指導の充実を図ることを目的とする、全国の高等学校で校内放送活動を指導している教員を対象にしたもので、例年12月下旬に開催されています。毎年全国の各都道府県から多くの参加者を迎えて実施されるこの指導者講座も今回が40回目となります。今年度は114名の参加者を迎えての実施となりました。



今回のプログラムは以下の通りです。

講座1「アナウンス・朗読指導」

講師：NHK日本語センター 専門委員 金野正人

講座2「実践発表 放送部の活動と指導法 ～??な放送部と共に歩む～」

講師：広島県立呉三津田高等学校 放送部顧問 荷宮嗣麿

講座3「番組制作指導」

パート1：番組制作にあたって（許諾と権利処理について）

講師：神戸国際大学附属高等学校 放送部顧問 島耕一

（第64回NHK杯全国高校放送コンテスト・審査部会長）

パート2：番組技術と模擬審査

講師：NHK制作局青少年・教育番組部 チーフ・プロデューサー 大本秀一

各講座では、参加者に9人～10人のグループに分かれてもらい、講師の話聞くだけでなく意見交換などを交えながらの展開になりました。特に講座1や講座3では「顧問交流」の時間を設け、各参加者の指導現場での実情や有効な指導のノウハウについての情報交換の場を設けました。また講座1および講座3のパート2は放送コンテストを想定した模擬審査を実施し、審査に当たっての評価の観点についての研究の場も設定しました。

各講座の実施報告は以下の通りです。

講座1 「アナウンス・朗読指導」

講師：NHK日本語センター 専門委員 金野正人

講座1はアナウンス・朗読指導にテーマを絞って、顧問交流と模擬審査が行われました。顧問交流では、日頃の指導の悩みや課題について活発に話し合いが進みました。各グループ10人ずつの編成で、ベテランからフレッシュな新人までバラエティーに富んだ構成になっているためか、それぞれの経験に裏打ちされた貴重な意見が飛び交い、時間が足りないというお声をたくさんいただきました。講師の金野先生も会場の話し合いに耳を傾けていただき、顧問の先生が日頃どのような悩みに向き合っているのかを吸い上げていただきました。



昼休みを挟んでの午後の講座は、まず、朗読の抽出箇所をどう切り取るかの実践講習から始まりました。抽出部分を切り取る実習は今回が初めての試みでした。今年の決勝の朗読課題で使用された、井上靖「わが母の記」の一部分を教材に、12のグループで、2分間の抽出箇所としてどこが最適かを話し合っていました。そして、その根拠と共に発表していただきながら、どのような観点で抽出するのかを学びました。「ここ以外に考えられない」という言葉も飛び出しましたが、各グループの話し合いの結果、なんと10か所以上の抽出候補がでて、会場が湧きました。改めて抽出の難しさを痛感するとともに、その可能性の広がりにも気づくことができました。金野先生のご意見もうかがいながら、抽出作業の実践を体験しました。最後に朗読したい方を募ったところ、勇気ある受講生が立候補してくださり、温かい拍手で締めくくられました。

そして、いよいよ模擬審査へ。コンテストの審査基準を確認後、早速アナウンスから模擬審査が始まりました。64大会の準決勝に進出した3人の3年生のアナウンスを聴き、審査しました。もちろん本番同様一切話し合いはせず、時間も本番の流れを意識して進めました。審査用紙回収後に、原稿を配布し、各グループでそれぞれの審査基準を明らかにして話し合いを持っていただきました。コンテスト本番では禁止されている審査員同士の話し合いが、この講座の目玉でもあります。自分の気づかなかった審査の視点を発見することができたと好評でした。そしていよいよ結果発表へ。会場のおよそ120名の審査点と、その最高最低点、そして金野先生の点数、そして最後にコンテストで実際につけられた点数の順番で発表しました。金野先生からは、次のような点がアドバイスされました。

- ・取材は幅広くしたほうが魅力的である。一人ではなく、様々な角度から。
- ・展開の順番に気をつけよう。結論を言ってから次につなげる。分かりやすさが一番。
- ・会話文を受ける言い方にバリエーションを。等

休憩をはさんで、朗読も同じ流れで模擬審査が行われました。全く違うタイプの3人の読みの生徒を審査したにもかかわらず、会場の審査結果が3人ともほぼ同点という珍しい結果になりました。この結果にも会場が湧きました。朗読審査の難しさと、審査の課題が見えましたが、金野先生のこれからの審査に役立つ見解に、みなさん聞き入っていました。

- ・冒頭部分の名詞は特にゆっくり読み、聴き手の理解を助ける。
- ・声を作り過ぎない。素直な声で。
- ・展開を理解して間を考える。等

時折、聞き直しをしながら審査の視点を確認し、講習を終えました。

全体として4時間を超える長い講座1でしたが、参加された皆さんの意欲的な取り組みと、金野先生のユーモアあふれる語り口で、和やかなうちに終わることができました。

講座2 「実践発表 放送部の活動と指導法 ～??な放送部と共に歩む～」

講師：広島県立呉三津田高等学校 放送部顧問 荷宮嗣麿

遠路はるばる、広島から講師としてお招きしたのは、昨年度までは五日市高校、今年度からは呉三津田高校で放送部の顧問をされている荷宮嗣麿（にみやつぐまる）先生です。荷宮先生が指導された両校のラジオドキュメント番組が、第64回NHK杯全国高校放送コンテストで決勝に進出し、現任校が優勝、前任校が準優勝という快挙を成し遂げられました。その強さの秘訣や、新しい学校でいかに組織を立ち上げていくかをお伺いしたく、荷宮先生に講座を担当していただきました。



講座では主に、前任校である五日市高校での取り組みを、ユーモアを交えながらご紹介いただきました。部員数は決して多くなくとも、生徒と毎日関わり指導することで、生徒との関係を構築されていること、時に厳しく指導する荷宮先生と、それをフォローする五日市高校放送部外部講師の竹下みどりさんの存在、広島で原爆の番組を作る覚悟。話は多岐にわたり、盛りだくさんの内容でした。

講座の後半には、質疑応答に代えて、顧問の先生方からよく寄せられる質問事項をスライドにし、お答えいただきました。ここでは荷宮先生が答えるだけでなく、会場内にいらっしゃる全国の強豪校やベテランの先生方にお答えいただくという趣向で、そのやりとりは大変興味深いものでした。講座終了時には荷宮先生から研修用の資料も頂戴し、受講者にとって嬉しいお土産となりました。

以下、受講者の感想をご紹介します。

「どんなことがあっても、部員と向き合う時間を毎日確実に作ることで、それが生徒の育成の第一歩であ

り、私のような1年目の若手に必要不可欠な仕事だと思いました。指導面のみでなく、向き合って成長を共にしていくことを大切にしたいと思いました。」

「荷宮先生が築き上げてきた放送活動の立ち上げからスケジュール進行、制作進行過程を紹介していただけただけではなく、資料までたくさん頂けて、右も左もわからない若手としては、大変嬉しかったです。」

「作品制作のコツだけでなく、部の在り方、生徒との接し方についても学ぶ点が多くとてもためになった。」

『「広島で原爆の話をするのは～」と考えていた1人でしたが、実際に作っておられる方が、よりその先のことを考えて作られていることを聞いてとても良かったです。この講座を聞かなければ、今後もそのように思い続けていたかもしれません。それだけでも、今回のお話を聞いて良かったです。』

「荷宮先生の講義であったが、相変わらずの刺激となった。情熱を持って仕事している人は素晴らしい。」

これら受講者の感想からも講座の充実度が窺い知れるのではないのでしょうか。時間が足りないと思うほど内容の濃い有意義な講座でした。

講座3 「番組制作指導」 パート1：番組制作にあたって（許諾と権利処理について）

講師：神戸国際大学附属高等学校 放送部顧問 島耕一
(第64回NHK杯全国高校放送コンテスト・審査部会長)

講座3は番組制作指導をテーマにした講座ですが、全体を二つに分けて行われました。前半は主に権利処理に関わることを中心に、第64回NHK杯全国高校放送コンテスト審査部会長の島耕一先生にお話をいただきました。お昼の校内放送など放送部の活動全般にわたる内容から説き起こしていただくことにより、権利処理について、単なる手続きではなくその意義まで踏み込んで展開していただきました。実際の作品の視聴を通じて具体的なポイントについても解説していただきました。



①放送部・委員会を活性化するためには

- ・お昼の放送をディスクジョッキー風にする。
- ・メモを取る習慣づけ…アナウンス原稿、番組の企画の材料になる。

・放送室・部室の雰囲気づくりも大切。

②顧問が留意すること

- ・伝えたいことを届けるために、最適なのはどのメディア（アナウンス／ラジオ番組／テレビ番組…）か。
- ・機材とスケジュールの確認をする。
- ・特に取材した内容を使う場合は5W1Hを入れるように指導する。
- ・原稿・台本はできるだけ易しい言葉を使い1文を短くするとわかりやすい。
- ・番組完成後はパソコン以外の一般の再生機器（CDプレーヤーやDVDプレーヤー）で再生できるか必ず確認する。

③顧問の役割

- ・顧問は部員・委員のマネージャーでありプロデューサーでありディレクター。
- ・人間関係を作っていくのも重要な役割（対部員・委員、対生徒、対教員……）。

④許諾・権利処理関連

- ・番組制作の際は、配付されたフローチャートで必要事項を確認する。
- ・映像作品を制作する際は「写り込み」に注意する。

講座3 「番組制作指導」パート2：番組技術と模擬審査

講師：NHK制作局青少年・教育番組部 チーフ・プロデューサー 大本秀一

番組制作の指導法をテーマにした講座3の後半は制作技術についての講習と模擬審査が行われました。今回講師をお願いしたNHK制作局青少年・教育番組部の大本秀一チーフ・プロデューサーは、第64回NHK杯全国高校放送コンテストの様子を紹介するNHKのテレビ番組「ティーンズビデオ」とラジオ番組「ティーンズラジオ」の制作を担当された方です。講座では会場から寄せられた質問についてのやり取りや、全国大会決勝進出作品の制作を指導された先生方をステージに招いてのクロストークなども交えて進められました。



1 番組模擬審査

ラジオドキュメント部門の3つの作品について模擬審査を実施しました。

作品1)「本を通じて人と人をつなぎたいという図書委員長の取り組みや、それを後輩に引き継ぐ努力を紹介した作品」

作品2)「原爆被害者が少なくなる一方、語り部として活動を始めた高校生にスポットを当て、活動の継承の意味と実際を報道する作品」

作品3)「授業中眠くなる先生とそうでない先生の違いを発声に見出し、比較と発声を変える事でどのように授業が変わるかを実験した作品」

模擬審査の結果発表の前、各班でディスカッションを行い、審査の視点を交流しました。

模擬審査の結果の発表の後、大本プロデューサーより講評がありました。

作品1 「こんな人がいますという紹介で終わっているのが残念」。他の人への影響が示されれば番組の主張も広げられたのでは。

作品2 被爆体験者でない高校生が「被爆者の志を伝える」という主張が示された。

作品3 切り口が面白いが、他の先生についても成功例が示せれば主張が普遍化し、「お得感」まで出せたのでは。

大本プロデューサーは「この3作品はあまり差がありませんでした。強いて挙げればこの番組で何を主張するかが明確かどうか。番組では「テーマ」と「取材」と「演出」の3つの要素のバランスが大切。ただそれを崩しても作品の肝が明確なほうがいい。」とコメントされました。

2 クロストーク

番組審査の後、NHK杯全国高校放送コンテストの番組部門で上位に入賞した3校の顧問の先生に登壇していただきました。大本プロデューサーに進行役をお願いし、会場から寄せられた質問を題材にしてクロストークを行ってもらいました。それぞれの質問に対して学校現場で生徒を指導している立場からの意見とプロの番組制作者の立場からの意見がクロスして奥の深いディスカッションになりました。

【まず何から始めればいいですか？番組制作するのにどのくらいの人数が必要ですか？】

- ・県内のベテラン先生に聞くことが有効でしょう。番組を作る上では絵コンテなどを描く必要のないテレビドキュメントやラジオ番組から取りかかるのがいいかもしれません。
- ・番組制作には1つの作品に4人ぐらいで十分です。

【機材・編集用ソフト：おすすめのソフトはありますか？】

- ・編集ソフトに凝らずに中身で勝負して欲しいと思います。

【取材・インタビュー：取材の仕方を教えてください】

- ・質問内容は用意していくが、取材相手と雑談をして関係を作ってから質問をするように心がけます。予定に捕らわれず、その回答について疑問に思ったことや確認をしたいことも追加で質問をさせていきます。インタビューでは事柄の説明でなく、その事柄に対する相手の気持ちを聞き出すことが大切です。
- ・取材相手によるが、アポ取りなどの根回しからなるべく生徒に任せています。

【スケジュール：番組制作の大まかな流れは？】

- ・理想は1年かけて作らせたいが、秋の大会後から始めて5～6ヶ月で仕上げるように指導しています。テーマによっては1～2ヶ月で作れてしまうものもありますが、顧問としては作らせ続ける事が重要です。

【ネタ探し・テーマ：テーマ設定の方法は？素材の見つけ方は？】

- ・ドキュメントに関しては新聞やSNSからネタにできる素材をファイルにまとめています。今年は転勤してきた顧問自身はその学校で不思議に思ったことをネタにしました。一つのネタも視点を変えて見直すと新しい発見をする場合があります。
- ・ドラマはプロットを1日1本作り、整理をしながら面白いものを残していくようにしました。プロットをすくっていくうちに見えてくる主題やストーリーを話し合っけてまとめていくようにしています。
- ・「高校生らしい視点」とは一言で言うと「高校生の目線」。社会現象を見たときに、大人からするとたいた問題に感じないような素材も、高校生には大問題に感じる場合があります。

【編集：番組のまとめ方は？BGMの入れ方は？】

- ・作り手の思い入れが強い場合があるので、作成者側は分かっているでも視聴者側には伝わっていない場合があります。第三者に視聴してもらい作り直す作業も必要ですね。
- ・例えば取材対象の素晴らしさを伝えて終わってしまう番組もあります。ただしその中でも「取材している側の悪戦苦闘」が見えた方が面白い番組になっていることもあります。
- ・ラジオでは特に場面の広がり表現させるため効果音が重要になります。臨場感を出すため、息づかい、会話、時には歌を収録したこともありました。
- ・最近のテレビ番組はテロップを四六時中入れているものがあります。この場合メッセージの濃淡が平均化され、大切なメッセージが目立たない危険性を生じます。色々な作品を見てどのような効果音、テロップを使うと伝わりやすくなるかをNHKの職員も常に研鑽しています。

【照明・音声：編集技術はどうやって身につけるのか？・機材の使い方は？】

- ・1年生の時は全てのことを色々やらせてみます。生徒がその作業で自信が持てたり、こだわりが持てるようになっていけば、分業して専門に任せる事も考えます。
- ・カメラワークについては、撮影する前に番組の中でその画像がどのような意味を持つのかを理解する事が重要です。一つの対象を撮影するにも、どの角度から、どの大きさで、画面のどこに位置させるかなどによって、その意味が大きく変わるからです。

【生徒への指導：顧問の介入のタイミングは？顧問がどこまで手を入れるべきか？】

- ・指導を重ねていくと、生徒がどの場面で失敗するかのパターンが分かってきますが、そこを指導せずに敢えて失敗させるようにしています。生徒のモチベーションも無理矢理上げる事はしていません。「失敗してもいい、とにかく何か自分の好きな番組を作ってみなさい」と言う姿勢を生徒に見せています。もちろん個別で指導は違っています。つきっきりで指導する方がいい生徒がいる一方で、ある

程度距離を置いて待った方がいい生徒もいます。

- ・生徒の企画力を上げる為には、企画会議などで意見を出し合い、そのテーマの内容を深めることを心がけています。ブレインストーミングの会議形式をとるのも効果的だと思います。

【部員集め：新入部員を獲得する方法は？】

- ・新入生歓迎の部活動紹介で、放送部の作成した番組を見せることが数少ないPRの場面です。例えば学校紹介ビデオを放送部が作成し、中学生への学校説明会で流すことをやっています。ただし、「放送部は面白い」というメッセージも必要ではないか。ある学校ではスケキヨマスクや馬のマスクをつけて勧誘した年に、15人の入部があった事もあったといいます。

3 まとめ

大本プロデューサーは、第64回NHK杯全国高校放送コンテストの様子を紹介するNHKのテレビ番組「ティーンズビデオ」の制作を担当されました。今回の番組は63回コンテストの様子を伝える昨年の番組と比較して構成が大きく変更されています。今まではNHKホールでの決勝に進出した作品が放送されていましたが、今回の番組は惜しくも決勝に進出できなかった作品も部分的に紹介されました。その背景についてコメントをいただきました。「一つ一つの作品についてそれぞれに光る部分があり、それを紹介することを重視しました。結果的に様々な傾向が見えてきたのがよかったです。」

番組制作の講座のまとめとして、次のコメントをいただきました。「題材は何であれ一つの番組にできます。番組作りの正解などないと思っています。同じテーマでも主張する要素、切り口や視点を変えることができます。NHKの職員も他の番組を見て研究を常にしているのです。」